

俺が志葉家当主なのは
まちがっている。

ゼルガー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——『隙間』、それは『この世』と『あの世』の境間。化け物達の入口であり出口。だから、決して除いてはいけない。なぜなら、三途の川から外道衆がやってくるからだ。そんな化け物達に立ち向かうため、世の為人の為に戦う侍達がいた。

「天下御免の侍戦隊！」

『シンケンジャー!! 参る!!!』

これは、pixivに投稿している「志葉家当主の俺が高校に通うのは間違っていないか？」の一年前。原作シンケンジャーのお話。

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。侍戦隊シンケンジャーのクロスオーバーです。

ただし、原作シンケンジャーとは設定がかなり異なります。主に某姫の性格が。

目次

第一幕「俺がシンケンレッドなのはま
ちがつている」 1

6
第二幕「人の為に強く戦う気持ち」

第一幕 「俺がシンケンレッドなのはまちがっている」

——『隙間』、それは『この世』と『あの世』の境間。化け物達の入口であり出口。だから、決して除いてはいけない。なぜなら、三途の川から外道衆がやってくるからだ。そんな化け物達に立ち向かうため、世の為人の為に戦う侍達がいた。

「控えおろう！このお方を何方と心得る！よおく聞け、外道衆共！此方に御座すのは300年の歴史より貴様達を葬ってきた侍の末裔、志葉家十八代目当主である、シンケンレッド・志葉八幡様だ！」

それは、顔に火の文字か書かれた仮面と全身真っ赤な侍の姿だった。

「さあ、大人しく隙間に帰るか、殿の刀の錆となるか「爺」はっ！」

「長い。」

「え。いやしかし、戦いと先ずは……」

「外道相手に聞かせても意味がないだろう。いざ、参る！」

赤き侍は刀〔シンケンマル〕を腰から抜き、ナナシの群れに走り出していった。

◇

今から10年前、血祭ドウコク率いる外道衆と先代志葉家当主率いるシンケンジャーとの戦いがあった。

しかし、激化する戦いの中、ドウコクは志葉家の本拠地に攻め込んできた。その際、4人のシンケンジャーと先代の当主は瀕死に追い詰められた。

先代当主は最後の力を使い、ドウコクを封印し、外道衆を三途の川に追い返すことに成功した。

だが、その代償は高く、先代の当主はそのまま死亡。他の四人も二度と戦えない体となってしまう。

そして俺は……

——— いか八幡！ 今日からお前がシンケンレッドだ！

——— 父さん……俺は……

——これからたくさん辛い目にあうだろう。それでも、この世を、多くの人を守るために、耐えなければならぬ。すまない、お前に全てを押し付けるこんな父を許してくれ。

——・・・わかった。だから安心してよ父さん。

——最後に・・・小町を・・・頼んだぞ

——父さん？父さーろーん！

あの日からだな。俺の目のハイライトが無くなったのは。

親父は死に、俺にシンケンレッドと獅子折神、そして妹の小町を託した。

俺はこの命に代えても、この世をあの人が戻るまで守らなくちゃならない。

・・・肝心のあの人があの性格だからなあ。

——よいか八幡！私は必ず帰ってくるからな！絶対に死ぬでないぞ！死んだら姉上、泣くからな！絶対に泣くからな！

やつべ、めつちや心配だ。あの人、本当に習得して戻ってこれるのか？ポンコツだし

なあ………

つと、そういうえば爺がもうすぐ次の世代のシンケンジャーがここに来るって言ったな。

正直、俺一人で十分だと思っている。一度も顔を合わせたこともない赤の他人を戦いに巻き込むのは不本意だ。

だが、これからの戦いは間違いなく激化するだろう。そうなれば、俺一人では対処できなくなる。

やはり、憎まれ役になるだろうが、言うしかないか。もし言えば、しばらくの間小町は口をきいてもらえないだろう。だが、必要なことだ。

たとえ家臣になるであろう奴らに嫌われることになるうとも、俺は覚悟が無い奴と共に戦う気は無い。

「お兄ちゃん！黒子さんがご飯出来たって！いつまで稽古してるのさー！」
「ああ、今行く」

もう夕飯の時間か。剣の腕はともかく、モチカラの修行はまだまだ未熟。

今だにアレを使いこなせてないからな………はあ、早く帰ってきてくれないか

5 第一幕「俺がシンケンレッドなのはまちがっている」

続く

なああの人

第二幕 「人の為に強く戦う気持ち」

俺を含む一族は現代において異端であり、異質で異常。俺もそう思う。時代錯誤だし、今時殿様や家臣なんてはやらない。

しかし、それでもこの体制は続けなければならない。かれこれ300年も続いているのだ。いや、続けなければならない。それもこれも全て、隙間の向こうにいる外道からこの世を守るためである。

でも、時代錯誤な侍人生っていうのはやはり現代社会では生きにくい。

余談だが、歴代シンケンジャーの活動は日本政府公認であり、巨大兵器にあたる侍巨人の保有を認める、戦いの被害による損害賠償の責任を負わないと権限を与えられている。

まあ、アヤカシや外道衆を相手にできるのは俺たちしかないから任されているってのが大きいんだろうな。

俺はコミュニケーション能力というのが低く、人見知りだった。おかげで今に至るまで友達ができなかった試しがない。俗にいうぼっちと言う奴だ。べ、別に寂しくねーし。

で、俺は何を言いたいか。それは……

「学校に行かなくていいなんてサイコー」

「うわ、珍しくめっちゃいい笑顔だよお兄ちゃん。そしてキモい」

「おい、キモいって言うなよ。傷つくだろ小町」

「え？今更傷つくの？」

小町ちゃん？それ、ひどくね？

「お兄ちゃん？学校行かなくていいって喜んでるけど、下手したら留年するってことだよ？来年受験しなくちゃならない小町もどうなるかわからないんだよ？それなのにサイコーは無いでしょサイコーは」

「あ、いや………悪かったな」

確かにこれは俺が悪かった。俺はついこの間終えたが、小町は来年受験だったな。黒子にお茶を入れなおしてもらい、少しすすって気を入れなおす。うん、美味い。

「そうだよな。お前もそうだが、爺が呼び出した顔も知らない家臣達も自分の生活を置

き去りにしてきてもらうんだよな。．．．正直に言えば、来てほしくないがな」

「まだ行つてるの？ 爺ちゃんも言つていたでしょ？ 一人で外道衆を相手にするのは危険すぎるつて。今は何とかお兄ちゃんだけで戦えてるけど、二ノ目になったアヤカシは獅子折神だけじゃ無理だよ？」

「そーなんだよなあ。まあ、実際にそいつ等が背中を預けてもいい家臣かどうかは、会つてから考えるがな」

「もう！ 相変わらぬ捨くれているんだから」

「あの人よりはマシだろ。もし、あの人だったら容赦なく切り捨てるぞ。例え、身内に甘い人であるあの人でもな」

これだけは断言できる。例え、俺と小町を溺愛する姉バカであろうと、この世と人々の命を守るためなら、身内相手でも容赦はしない。

昔、ここを去る前に何度も稽古してもらつたら、普段の姉バカな性格は無くなり、容赦のかけらもない修羅だった。ああ、今も俺と小町にとってはトラウマだよ。

「で、その呼び出してもらつてる家臣さんたちは何時来るの？」

「さあな。黒子達が迎えに行くと言つていた。なるべく早く連れ来てくると言つていた

が………」

ともう一度茶を飲もうとしたときだった。

下手に設置されているスキマセンサーが大きな音を立てて鳴り響いた

「アヤカシか……場所は●区か」

「ここからだとして少し距離があるか。仕方ない、馬を呼び出すか。」

「小町、黒子達に他の家臣を底に連れて行くよう指示しろ」

「うん！死なないでね」

「当然だ、俺は死なん」

そう、俺は死ぬわけにはいかないんだ。

俺はシヨドウフォンで馬を呼び出し、アヤカシが出現した現場に向かった。